

言語環境とタイ人日本語学習者の「のだ」の使用に関する考察

坪根由香里

1. はじめに

日本語は様々な文末表現によって話者の心情が表される。坂本他(2008:121)では、「発話意図」や使用の「パターン」を認知しにくいものは習得が難しく、文末表現は実質的な意味が希薄で、他の形式との微妙な意味の違いや使い分けの認知が困難な形式であるとされているが、「のだ」も、実質的な意味の希薄さや機能の複雑さから学習者にとっては習得が困難なものの一つだと言えるであろう。また、坂本他(2008:121-124)は、「のだ」を含む文末表現の習得には、言語能力と十分な言語接触を提供する日本滞在期間が必要だとし、言語環境の影響について述べている。

では、日本で生活し教室指導以外にも日常的に豊富なインプットが得られる環境と、海外という日本語のインプットが限られた環境では、学習者の「のだ」の使用にどのような違いがあるのだろうか。また、言語能力はどのように影響しているのだろうか。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

日本語の文末表現の習得に関する先行研究には、前掲の坂本他(2008)の他、峯他(2002)がある。峯他(2002)は、海外で日本語を学習した場合、使用される文末表現は日本国内での自然習得者に比べ少なく、特に「んです」の習得が難しいこと、言語接触があっても言語能力が伴わなければ言語使用には制限があること、文末表現の習得には言語能力だけでなく言語接触環境も大きく関わっていることを指摘している。

筆者は、タイ在住の日本語学習者を対象に縦断的調査を行い、坪根(2012)において、日本語能力と「の」の使用は関係しており、海外の環境でも能力が高ければ様々な用法の産出が可能であることを指摘した。調査期間中、6週間の留学を経験した学習者もいたが、「のだ」については留学による直接的な影響は確認できなかった。

そこで本稿では、言語環境が「のだ」⁽¹⁾の使用に与える影響について更に検証するため、タイ在住のタイ人日本語学習者を対象に行った2年間の縦断的調査から、調査期間中に1年間の日本留学を経験した学習者とそうでない学習者の「のだ」の使用状況を比較することとした⁽²⁾。結果の分析においては、言語能力との関係についても併せて考察する。

3. 調査の概要

タイの大学(以下、X大学)で日本語を学ぶタイ人学習者18名を対象として、2006年1月～2008年2月に計5回、約30分のインタビューとロールプレイ(以下、RP)3つを実施した。イ

インタビューではウォーミングアップとして最近の状況について質問し、今までで困ったこと、嬉しかったこと等の質問、説明・意見を引き出す質問の他、学習者から調査者へも質問

表1 各学習者の属性及び SPOT の結果

学習者	性別	日本留学経験	留学時期	SPOT 1回目	SPOT 2回目	SPOT 伸び
T1	男	なし		32	62	30
T2	男	6週間	調査1と調査2の間	19	49	30
T3	女	6週間	調査1と調査2の間	31	47	16
J1	女	1年	調査2と調査5の間	24	48	24
J2	女	1年	調査2と調査5の間	14	31	17

させた。質問と答えのやり取りだけでは「のだ」の用法が広く出現しないと考え、「のだ」の使用の可能性のある場面を設定した RP も実施した。RP の内容は、5回の調査を通して、①様々な場面での依頼、②状況や出来事の説明、③苦情・文句の3種類で、カジュアルスタイルの使用も促すため、友人同士の設定も含めた。2008年2月にはフォローアップインタビュー（以下、FI）も行った。また、2006年1月の調査開始時と2008年2月終了時には日本語能力を判定するために SPOT (Simple Performance-Oriented Test) (Ver.A) ⁽³⁾ を実施、終了時には三肢選択テストと自由記述式調査も行った。さらに、必要に応じて、メールでフォローアップアンケートも実施した⁽⁴⁾。

日本滞在経験と言語能力による影響を見るため、2回目の SPOT テストの上位3名、及び、調査2の後に日本に留学し、1年後に帰国して調査5を受けた2名の計5名を抽出した。5名全員が大学入学後に日本語学習を始めている。各学習者の属性及び SPOT の点数は表1の通りである。1年間の留学経験者（以下、JS）を J1、J2 とし、それ以外（以下、TS）を T1～T3 とする。

J1 は2回目の SPOT で T2、T3 と同程度の点だが、点数の伸びは18名中5番目であり、J2 は SPOT の点数の伸びは大きくなく、2回目の SPOT でも全体の中位の成績であった。この結果からは、TS と比較して、1年の留学が言語能力の大きな伸びにつながっているとは言えない。

4. 結果と考察

表2は調査1から調査5のインタビューに出現した「のだ」の使用数をまとめたものである⁽⁵⁾。以下、インタビュー・RP 中の用例を FI・自由記述式調査の内容を参考にしながら分析する。

4.1 TS と JS に共通して見られる特徴

(1) 「のだが前置き」「のだが言いさし」

表2を見ると、「のだが前置き」「のだが言いさし」は5名全員が使用している。このことから、この2つの用法は滞在経験にかかわらず使用されやすいものと思われる。

それぞれの用例を見ると、JS は調査5において様々な形で使用している。TS は、T1 が当初から様々な表現を用いているが、T2 は調査4まで「お願いがあるんですが」という依頼の前置きと

表2 「のだ」使用状況集計

正用数(誤用数)

学習者	用法	1	2	3	4	5	学習者	用法	1	2	3	4	5	
T1	のだ説明告白			(2)			J1	のだ説明告白					1	
	のだ説明教示	1			1			のだ説明教示						
	のだ強調							のだ強調						
	のだ非難					2		のだ非難						
	のだが逆接			1				のだが逆接						
	のだが前置き	1	2	1		3		のだが前置き						3
	のだが言いさし	1				2		のだが言いさし						1
	のか説明求め							のか説明求め	1					
	のか非難				1			のか非難						
	のかスコープ					1		のかスコープ						
	の非難				1			の非難						
の確認			1(1)			の確認								
のではないか					1	のではないか								
T2	のだ説明告白					2	J2	のだ説明告白					1	
	のだ説明教示			1*				のだ説明教示					(1)	
	のだ強調							のだ強調						
	のだ非難							のだ非難						
	のだが逆接							のだが逆接						
	のだが前置き		1	1	1	2		のだが前置き					2	
	のだが言いさし					1		のだが言いさし						1
	のか説明求め							のか説明求め						
	のか非難							のか非難						
	のかスコープ					1		のかスコープ						
	の非難							の非難						
の確認						の確認								
のではないか						のではないか								
T3	のだ説明告白						R	*は調査者の質問の繰り返しとして産出されたもの 正用が出現した用法 初めての正用 しての定型表現のみで、調査5になって定型表現以外の表現を使用(②)、T3は調査3で使用しているが、その後の使用は見られない。 (以下、Rは調査者)						
	のだ説明教示													
	のだ強調			1*										
	のだ非難													
	のだが逆接													
	のだが前置き			2										
	のだが言いさし			1										
	のか説明求め													
	のか非難													
	のかスコープ													
	の非難				1									
の確認														
のではないか														

①T1: まだわからないんですが。(調査1「のだが言いさし」)

②T2: あの、週末なんなんですが、あ、私は、クラスメートと一緒に、あ、う、海へ行きますが、休ませていただけませんか？(調査5「のだが前置き」)

③J1: 週末の土曜日なんですけど。(調査5「のだが言いさし」)

④J2: 実はあ、今週の週末は友達と約束があるんですけど、あ、休ませていただけませんか。(調査5「のだが前置き」)

(2) 「の」

終助詞の「の非難」を T1 と T3 が使用しているが、用例を見るといずれも「何言ってんの？」(T1:

調査4)のような疑問形での使用であり、終助詞「の」の使用自体が見られないJSと合わせて、5名全員が平叙文で終助詞「の」を使用していない⁶⁾。

坪根(2012)で、TSが、疑問文の「の」は「のですか」ではなく、ます形に対応する話し言葉の疑問形だと考えており、説明場面(平叙文)では「の」を使用していないことが述べられているが、JSも平叙文の「の」について認識していない可能性がある。

4.2.2 TSとJSの違い

(1)平叙文の「んだ」

上述の通り、平叙文の「の」はTS・JS共に使用していない。しかし、J1は、カジュアル場面で「んだ」を使っており自然な表現となっている。

⑤ R: <J1>さん。この前の旅行どうだった?

J1: え、ちょっと…。行く途中で雨が降って、で、でした。でちゃって。降ってきちゃって、行けなくなっちゃったんだ。(調査5「のだ説明告白」)

J2は「の」が使用可能な場面で普通体を使用していたが、自由記述式調査ではA「何で遅く行ったの?」B「ちょっと事故をあったんだ。」という例を示し、疑問文の「の」と「んだ」を対応させている。また、J2はFIで「どこへ行きたいんですか。」という文は、友達の時「どこに行くの?」になると述べており、「のか」と「の」の対応も理解している。

(2)「のだ説明告白」

TSではT2のみが正用しているが、JSには「のだ説明告白」の正用が共通して見られる。特に、SPOTの点数で上位にはいないJ2に自然な使用が見られるのは特筆すべきであろう。先行研究では、峯他(2002)、坂本他(2008)が文末表現の習得には言語能力と言語接触環境が関わるとしていた。しかし、本調査のJ2は、「のだが前置き」「のだが言いさし」をSPOT上位者同様に使用し、T2以外のTSが正用していない「のだ説明告白」を正用していた。このことは、言語能力が高くなくても十分な言語接触によって「のだ」を習得する可能性があることを示唆している。

⑥ R: はいはい。あ、<J1>さん。この前の旅行どうだった?

J1: え、ちょっと…。行く途中で雨が降って、で、でした。でちゃって。降ってきちゃって、行けなくなっちゃったんだ。(調査5「のだ説明告白」)

⑦ J2: 私な、私、今私はこのホテルに着いて、でも、あ、Araina部屋がないんです。

(調査5「のだ説明告白」)

SPOTで高得点を得、「のだ」を幅広く使用しているT1は、本来非使用のところで「のだ説明告白」を用いている(⑧)。ここでは「ぶつかりました」の方に「のだ」を付けた方がいいが、「のだ」は使用されていない。T1の誤用はこの調査3のみだが、その後この用法の正用も見られない。

⑧ R: えー、どんな事故ですか。

T1: んー、んー、ほかの車と**ぶつかりました**。(中略)

R: そうですね。じゃあ相手の車の人はどうですか？

T1: んー、死ななかつたんですよ、ぶつ、ぶつ、ぶつかれた後、彼は逃げました。(調査3)

JSが「のだ説明告白」を正用し、日本語能力は非常に高いが留学経験のないT1に正用が見られないのはなぜであろうか。この用法は文脈依存度の高い用法である。そのため、日常的にかなり頻繁に文脈を伴った場面でのインプットを受ける必要があるということが考えられる。また、文脈の中でアウトプットが不足していたためである可能性もある。つまり、T1は映画やドラマから意識的にインプットを得ていたが、なおインプットが不足していたか、それを使う機会が限られていたということが原因として考えられるが、この点は更なる検証が必要であろう。

(3)使用の広がり と 機能の理解

一方、調査回数の違いはあるが、表2を見ると、特にT1が幅広い用法を使用していることがわかる。T1はSPOTでJSと比べても飛び抜けて点数が高く、使用の広がりという点においては、日本語能力が影響している可能性が考えられる。しかし、FIや自由記述式調査からは、使用はしていなくともJSが様々な用法について認識していることがわかる。

J1はFIで「んです」は知っていることを確認したい時に使うと述べ、「昨日、AさんはBさんと一緒に映画館に行ったんでしょ」「行ったんだよね」という例文を出している。また、「悪くないのだろうか」という文を挙げて、「前の文に連続します」「悪いかどうか相手に(中略)考えさせたいと思います」と述べ、「の」の文脈依存の機能を理解しているように見える。これらはT1からも得られなかったものである。さらに、「それはいいんじゃない／～いいのではないか。」という例を挙げて、意見を言う時の使用についても記述している。

J2はFIで、「どこへ行きたいんですか。」という例を示して、本当はどこへ行きたいかという返事を知りたい時に使うと述べ、「んですか」が特別な機能を付加することを認識しているようである。また、「んです」は「(学校を休んだ時)用事があったんです。」のように理由を表す時、「んですが」は今週用事があるときに「そのことなんだけど。」のように話したいことを強調する時や、「いいんだけど、だけど時間がかかってね。」のように反対のことを言う時に使うと述べている。

TSは使用された用法以外の言及はなく、T1以外は限られた用法の使用・理解に留まる。JSはインタビューでの使用は限られているものの、日本語能力の高いT1と同程度あるいはそれ以上に広く「のだ」の用法を認識し、文脈依存やモダリティの機能としても理解しているようである。

5. まとめと今後の課題

本稿では、日本滞在経験と「のだ」の使用との関係について、言語能力との関係も併せて考察した。JSとTSは共に「のだが前置き」「のだが言いさし」を使用し、終助詞「の」は疑問文のみで使用しており、これらは1年間の日本滞在による違いは見られなかった。一方で、JSのみが「の」疑問文に対して平叙文では「んだ」を正しく対応させていた。また、TSは1名のみ正用であ

った「のだ説明告白」をJSは2名とも正用しており、この用法は日常的で頻繁なインプット、あるいは、文脈を伴った場面でのアウトプットが必要である可能性がある。日本語能力と「のだ」の使用には関係があると思われるが、J2の使用状況からは、言語能力が高くなくても十分な言語接触が「のだ」の使用に結びつく可能性が示唆され、先行研究とは異なる結果となっている。

本研究では、1年間の留学を経験した学習者とそうでない学習者を対象に、縦断的に「のだ」の使用を調査した点で、これまでにない研究であると言える。しかし、一機関の学習者を対象としており、用例も少ないため、上記特徴が他の対象者にも見られるか検証する必要がある。特に、言語能力と言語接触との関係については、本研究の結果を仮説とした更なる調査が必要であろう。

注

- (1) 「のだ」には「んだ」「のです」「んです」等文体上異なるものも含める。また、終助詞「の」も「の(準体助詞)+だ」の「だ」が落ちて終助詞化したものと捉え、分析対象とする。
- (2) 本研究の対象は留学生であるため、自然環境でなく教室学習と自然環境の混合環境である。
- (3) SPOTテストについては坪根(2012)参照。
- (4) フォローアップインタビュー、フォローアップアンケートでは、内容確認の他、使用例を示し、各用法をどのように知り、使えるようになったか、どのような時に使うか等を尋ねた。
- (5) 「のだ説明告白」は「話し手だけが知っているはずの情報を聞き手に提出する」もの、「のだ説明教示」は「聞き手が知らないことが確実であると思われる情報を話し手が提出するもの」、「のだが前置き」は後件の用件に先立って述べられる前置き表現、「のだが言いさし」は「のだが前置き」の後件が省略された形のものである。
- (6) TSの使用はどちらも調査4であることから、調査5のRPが「の非難」を使用しにくいものであったことも考えられる。

参考文献

- 小柳かおる(2004)『日本語教師のための新しい言語習得概論』、スリーエーネットワーク
- 坂本正・小柳かおる・長友和彦・畑佐由紀子・村上京子・森山新(2008)『多様化する言語習得環境とこれからの日本語教育』、スリーエーネットワーク
- 坪根由香里(2012)「タイ人日本語学習者の『の』の使用—2年間の縦断的調査より—」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』第9号、pp49-58
- 峯布由紀・高橋薫・黒滝真理子・大島弥生(2002)「日本語文末表現の習得に関する一考察—自然習得者と教室学習者の事例をもとに—」『第二言語としての日本語の自然習得の可能性と限界』(平成12~13年度科学研究費補助金研究萌芽の研究 研究成果報告書 課題番号12878043)、pp64-85